

デジタル時代の出会いにおける「距離」と「身体性」 —対人相互作用研究「から」そして「へ」の示唆—

秋本 倫子

I はじめに

筆者は共同研究により、心理療法において、セラピストとクライアントの間にどのように、共感を柱とする関係性が形成されるのか、箱庭療法を媒介にした実験研究により探究してきた(Akimoto et al., 2016)。そのため、実際には「守られた」空間で行われる箱庭療法を、実験室内でどの程度再現できるか、その可能性と限界についても検討してきた。これは心理学で古くからある生態学的妥当性(Schmuckler, 2001)の問題であり、これについては既に別の小論(秋本, 2019)で論じている。そこへ来て、事態が急転直下した。COVID-19(新型コロナウイルス感染症)流行のために、そもそも実験室内に協力者を集める、ということ自体ができなくなった。

人と直接会って話す、人の支援をする、人の相談に乗る、あるいは人と人が出会う場を設定する、という形の仕事、営みはほとんどすべてできなくなった。あるいは、大幅な形式の変更を余儀なくされた。そして、実験室内でのシミュレーションどころではなく、ヴァーチャルで、オンラインで、ということまで選択肢に入れる必要が生じた。非現実が、現実をいきなり飛び越えてしまった感覚である。

そうになると、そもそも、こうしたオンラインでのヴァーチャルな出会いが、1つの実際の場を共有しての出会いにどこまで代わり得るのか、そこでの対人関係、とりわけ共感的なそれがどのようにして成立し得るのか、あるいは成立し得ないのか、を検討することが必要になった。このことは既に様々な場で討論されていると思うが、ここでは、特に「距離」「身体性」の観点から考察し、「リアルとヴァーチャルの間」、そしてそれが研究に示唆するものについて考えてみたい。

II オンラインにおける出会いをめぐる要因

1. 「距離」

(1) 人間における「距離」

新型コロナウイルス感染症(以後、COVID-19とする)の流行で、人と人の距離の問題が

大きくクローズ・アップされた。いわゆる「三密」すなわち密閉、密集、密接を避け、ソーシャル・ディスタンスを守ること (social distancing) が感染拡大防止になるとして盛んに勧められるようになった。いずれも人が存在する空間の問題であるが、「密閉」は、本来、心理臨床においては「守られた」雰囲気を作るために、重要なことであった。「密集」は、集団で共に存在する、社会的存在としての本質的な在り方に関わり、「密接」は、人と人の距離の近さ、従って親しさに関わる。

こうした距離の問題 (Proxemics) を扱ったのが、米国の文化人類学者 E. Hall による『かくれた次元』(原題: *The Hidden Dimension*) (1966/1970) である。この書では、人間が、距離をいかに知覚し、目的に応じて使い分けているかが、動物との対比や文化差を交えて論じられている。

Hall (1966/1970) によれば、もともと、動物において「距離」は、なわばり行動と関係し、「生物学と生理学に深く根ざしたもの」である。しかし人間は、他の生物と異なり「自分の体の延長物 (extension)」(コンピュータ、車、言語等) を作り出したことによって、対人距離、空間を拡げ、「進化の過程をおそろしく早めた」(p.7)。

Hall (1966/1970) は、人間を社会環境の中で観察した結果、人間における距離を、「密接距離 (intimate distance)」、「個体距離 (personal distance)」、「社会距離 (social distance)」、「公衆距離 (public distance)」の4つに分けた。「密接距離」にも「身体的接触もしくは身体的なインヴォルヴメントの可能性の大きいことが、双方の意識の最上層にある」愛撫、格闘、慰め、保護の距離である近接相と、手で相手の手に触れたり握ったりできる遠方相 (6-18 インチ。1 インチ=2.54 cm) があり、いずれも、「他の人間の存在がはっきりととらえられ」「視覚、嗅覚、相手の対応、息の音、におい、感じなどのすべてが結合して、他人の身体と密接に関係しているというはっきりとした信号になる」距離である。次の「個体距離」には、「相手を抱いたりつかまえたりできる」近接相 (1.5-2.5 フィート。1 フィート foot = 30.48 センチ) と、遠方相 (2.5-4 フィート)、「片方が手を伸ばせばすぐにさわれる距離のすぐ外から、両方が腕を伸ばせば指が触合う距離までの範囲」、「真の意味での身体的支配の限界」がある。そして、「この距離では、個人的な関心や関係を議論することができる」(Hall, 1966/1970, 第10章, pp.160-181)。心理療法、カウンセリングはこの距離で行われることが多いだろう。心理療法やカウンセリングにおいて「一定の距離を保つ」と言うとき、それは心理的距離のことでもあるが、それより先ず物理的、身体的距離でもある。触れようと思えば触れられるが、敢えて「遠ざけて」いる距離でもある。心理療法、カウンセリングのクライアントにとって、近過ぎることはかえって脅威を与えかねず、遠すぎても“親身”な話、つまり親しくその人の身に寄り添うような話ではできない。

そして、「社会距離」(social distance) は、『「支配の限界」を示す』距離であり、「顔のこ

まかいディテールは見てとることができないし、特別な努力をせずには相手に触れたり触れようとしたりできない」距離である。「社会距離」にも近接相（4-7フィート）と遠方相（7-12フィート）があり、近接相は、「個人的ではない用件」「遠方相におけるより入りくんだ用事がおこなわれる」距離であり、一緒に仕事をする場合に用いられやすい距離である（Hall, 1966/1970, 第10章, pp.172-173）。COVID-19感染防止に盛んに言われてきた6フィート（日本では2メートル）は、ここに入る。

「社会距離」のうち、遠方相（7-12フィート）は、「より形式張った性格」を持った「業務や社交上の対話」がおこなわれる距離である。さらに「公衆距離」（近接相：12-15フィート、遠方相：25フィート以上）があるが、これはそもそも「インヴォルヴメントの十分外側にある」、つまり、関わらない距離である（Hall, 1966/1970, 第10章, pp.172-173）。

「social distancing」という表現は、人と人の心理的な関わりまで遠ざけるような誤解を招きやすいので、「physical distancing」と言い換えよう、という動きがある。が、social distanceというのは、関わりがぎりぎりの線であることがわかる。そして、Hall（1966/1970）の時代以降、人間における「社会距離」はどんどん拡がりつつある。インターネットによって、世界の津々浦々と瞬時につながることが可能になっている。しかし、上記で見てきたように、「社会距離」には、それにふさわしい目的があり、目的外では不都合、あるいは不自由な距離である。

(2) オンラインでの出会いと「距離」

オンライン、つまりスカイプやLINE、特にZoomで個人や集団と会話、会議、授業などをして1つ気がつくのは、この「距離」の調節ができないということである。本来は親密な関係でのみ話したいようなことも、また、目上の人との会合も、全て、距離は同じである。私たちは、通常の出会いであれば、相手に対する警戒心を徐々に解き、距離を少しずつ縮めて親密な関係に入っていくが、そうした段階を踏むことができない。距離は時に敬いの意味を持つが、相手がどれほど地位の高い人でも距離は同じになるだろう。遠方にいる家族同志、心を許し合った恋人同志が会うときも、ビジネスの交渉相手と会うときも、親しさとは無関係に同じ距離感である。

さらにZoomでは、人数が増えると、いきなり場所が移動したり、見えない画面に行ってしまうたりする。そして、相手はまるでタイムマシーンに乗ってきたかのように突然画面に現われる。人と人の出会いは通常はそうではない。人は遠くから次第に近づいてくる。場合によっては、「公衆距離」から、あるいは、ドアを開けて入る、という段階を経て「社会距離」から、目的に応じて距離を縮めていくのである。したがって、出会いは徐々にあり、途中に予測、予期があり、もしこれが警戒を要するような相手であれば、「戦うか逃げるか反応」、

つまり相手が持つ危険性を判断し行動を起こす時間的余地がある。逆に好ましい相手に出会うと思えば、喜びの期待がある。

しかし、オンラインでの出会いは、そうした余地を与えない。「いきなり」であるため、侵襲的に感じられることもあろう。

デジタル空間は、現実には物理的に遠い存在を、「密接距離」にいきなり、生じさせる。そこでの知覚は、人工的に再合成された視覚と音声に頼るのであり、息の音、匂い、空気感、相手の体温、といったものは伝わってこない。もちろん、相手の身体に直接触れることはできない。また、基本的には顔中心の上半身しか映らないので、実際の人がどのぐらい大きいのか、どのような背格好をしているのか、後ろ姿はどんなであるか、も知ることはできない。既に知っている相手なら、記憶を頼りに想像を補う。したがって、そこでは、過去の体験についての記憶と、想像力が鍵となる。

他方で、オンラインで即座に会える、という手軽さによって、失われるものもあるかも知れない。離れていること、見えないことが想像力を豊かにすることはあるだろう。

武者小路実篤（1952）による『愛と死』は、結婚の契りを交わした恋人同志が、片方の留学によって物理的に離れ、異国同志、手紙のやりとりをして再会を待つ物語である。船により渡欧していた頃で、船が日本に近づくにつれて、再会の期待、喜びが増していく。その期待は無残にも打ち碎かれる。打ち碎いたのがスペイン風邪であった、ということは、今読み直すと意味深長な感じがするのだが、手紙のやりとりのみで、見えない相手への思いをいかに膨らませ、愛情を交わせるか、というのが、手紙のみでやりとりすることがすっかり少なくなった今日には実に新鮮である。

より現代的な小説、平野啓一郎『マチネの終わりに』（2016）は、実際には3度しか会わなかった男女が恋愛を深めていく話である。携帯電話やスカイプでの会話が間をつなぐ。これらでもつながれない時期があったり、こうした道具が逆に誤解を生んだりすることで物語は展開する。何の障害もなくオンラインで容易につながれる関係では、待つ時間という余白が削られ、その分、想像も膨らまない、のではないだろうか。誤解や幻想は減るのかも知れないが、それこそ波乱万丈の小説にはならないだろう。

デジタル空間での出会いには介在物がなく、ということもある。このことを、百木（2020）は、政治思想家ハンナ・アーレントが、人々がテーブルという介在物を介し一定の距離を置いて共通の関心事について話し合うことを「公共性」＝複数性の実現であるとしていることに触れ、インターネットでは、「良くも悪くも」「物理的距離が無効化され、我々は『介在物』なしに人と向き合わなければならない」ため、「公的空間と私的空間の境目がなくなる」、「他者と適切な距離を保ちながら問題性を共有し、且つ複数性を持った議論を重ねていくことは容易ではない」と述べる。「結びつけ分離する介在物」が重要なのだという。

オンライン空間では、1対1の場合、まず、正面向きの相手との対峙があり、ふとテーブルの上に目を落とすとか、窓の外に目をやるとか、時にうつむいて沈黙し、床の模様だけを眺める、ということが許されなくなる。相手のまなざしが強すぎると感じられる時、間にあってその影響を弱める緩衝材が存在しない。

2. 身体

(1) 身体があること、見えること

「密接距離」を求める場合は別として、「個体距離」から「社会距離」までの出会いでは、直接身体が触れあうことは全くないか、ないに近い。それを考えると、オンラインでこれらを代用する場合、身体の直接的な触れ合いができなくても、さほど不足はないとも考えられる。それどころか、他者に身体があることで脅威を感じやすい場面、たとえば目上の人と話す時、実際に会うよりもオンラインの方が楽に感じられるかも知れない。

デジタル空間では、そもそも、相手の姿が見えなくても、想像力ゆえ、相手が存在する感覚をかなり持つことができる。そして、相手の姿が顔や上半身だけであっても、下半身があると暗黙のうちに想像する。自己や意識にとっての身体を重要視する身体性哲学を発展させた Merleau-Ponty (1945/1982) によれば、私たちは「自身の運動を意識し、この運動の諸相を貫いて同一なものとしての私の身体を意識しているのでなければ」、すなわち、「身体的経験を媒介としなかったなら、この対象の統一を捉えることはできない」(p.332) のであり、すなわち自己の身体経験を通すことで、たとえ相手が真正面、上半身しか見えなくても、それを様々な角度から見る事が可能な統一的な主体として知覚する (Merleau-Ponty, 1945/1982, pp.332-336)。ゆえに、身体を持っていることが、オンラインの二次元空間での出会いには必須である。逆に、身体があることで、ヴァーチャルな世界での疑似体験が成立するのだと言える。他方で、見えない部分の姿勢や動作は正確には把握できないわけである。奥行きがない、影がない。想像は、現実を裏切ることがある。自らの身体経験を土台にして知覚する奥行きは、実際とはずれているかも知れない。

Zoomの登場で、個人的にもう1つ大きなインパクトを持ったのは、自己像が見える、ということだった。見える、ということは隠す可能性も含む。顔や上半身、それも上部に焦点が置かれることで、それより下は意識的に隠しやすい。顔で笑ってその下で泣いて、ということを意識的に行きやすいのではないか。

芥川龍之介の短編『手巾』(1916)では、新渡戸稲造をモデルとする“先生”長谷川謹造のところに、一人の婦人が訪ねてくる。その婦人は、“先生”の教え子であり、息子が病死したことを知らせに来たのだが、そのことを語る様子が、「少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくない」平然とした様子で、口角には微笑さえ浮かんでおり、外貌だけ見ると、

あたかも「日常茶飯事を語っている」としか思わない風であった。しかし、その後“先生”は、床に落とした朝鮮団扇を拾おうとして、偶然、婦人の膝の上で、手巾を持った手が「はげしくふるえている」のを目撃する。本来武士道を称賛する意図で書かれたらしいこのエピソードは、身体が表情を裏切り感情を露呈させるの見事な例なのだが、オンライン空間では、このような「ふるえる手」をまんまと隠し通すことができるだろう。つまり、仮想現実であるオンラインの出会いでは、操作・加工することも、見せたくないものを隠す、ことも可能だということになる。

(2) 人生における発達と身体性

本来、身体が直接的な意味で最も重要なのは、Hall (1966/1970) による「密接距離」を取る人間関係においてである。母子の触れ合い、密着した関係は愛着形成に重要であるし、抱き合うことなくして親しい者同士、家族、恋人同士の親密な関係は生まれない。これらの親密な関係の剥奪は、人類の生存に関わる。特に重要なのは人生の最初と最後である。生まれ出てきて間もない赤ん坊は、触覚を頼りに、母親のお腹の上で、母親の乳房を探し、それに辿り着き、口を使って吸い付き、母親との再結合をする。母親に抱かれることにより、安心し、抱かれること、あやされることの繰り返しにより愛着関係が形成され、子どもは成長、発達を遂げていく。乳児にとって母親の匂いは重要で、声や肌触り touch などと統合して母親表象を形成するのだという (Sullivan et al., 2012)。もし、母子までもが social distancing をしなければならなかったら、子どもの発達は阻害されるだろう。Yamamoto ら (2019) は、ハーフミラーとビデオカメラを用いた「ダブルTVパラダイム」で、24ヶ月児とその母親を対象とした模倣実験を実施した。この実験では、玩具のデモンストレーター (母親) と被教示者 (幼児) の間にわずか1秒のコミュニケーション遅延が挿入されただけで、幼児の模倣学習に影響があったという。このことは、「今」という時間性に人がいかに敏感かということと、直に相互作用することの重要性を示唆する。仮に乳児か母親の一方に心身の重度の問題 (たとえば片方が COVID-19 に感染するということもあり得るのだろうか) があって、両者を引き離さなければならない状況になったとしたら、考えなくてはならないことであろう。

他方、ライフサイクル論で有名な E. H. Erikson & J. M. Erikson (1998/2001) は、人生の第9段階、すなわち最終段階では、人生の最初の段階での基本的信頼が再び重要になると共に、「触れること」による「^{コンタクト}交流」(p.187) が重要になると、述べている。特に、心身に障害を負った高齢者は、手を握られること、触れられること、体をさすられることにより、人とのつながりを再び取り戻し、安心する。COVID-19 の感染が収束しない状況は、高齢者介護の場から、こうした触れあいを奪っている。高齢者は他の世代の人々から切り離され、

また、同世代同志でも、直接触れあうことを許されなくなった。施設に入居していても、家族とはガラス越し、カーテン越しに会うか、予約制で面会するという。オンライン面会は推奨されるが、可能なのは恵まれた少数の人々である（朝日新聞, 2020b）。

さらには、高齢ではなくても、最期の別れ、看取りの場もコロナは剥奪した（朝日新聞, 2020a）。手を握り合つての、間近でのお別れ、ということも、死後の葬儀で遺体に触れて別れを告げることもできなくなった（東洋経済ONLINE, 2020）。

家族は高齢者を介護するとき、また看取りの場において、そうして棺での死者との対面において、触れる手によって、それまでの関係性の中に蓄積されてきた万感の思いを、感謝や苦勞多き人生へのねぎらいや、なし得なかったことへの後悔や謝罪の気持ちも含めて伝えるのではないだろうか。その最後のチャンスが、触れられない、今、奪われている。

他方で、これら本来なら「密接距離」でしか得られない身体性を、何とか擬似的に再現しようという試みもなされている。ロボット研究者の石黒 浩（2016）は、人が人の存在を感じるのに最低限の条件は何かを考え、「2つのモダリティで人間らしさを表現する」（p.507）という仮説を呈示している。この2つのモダリティというのは、例えば「形」と「声」とか、「形」と「匂い」だという。「形」と「声」はまさに、遠隔コミュニケーション・ツールで用いられているものである。「声」と「匂い」という組み合わせもある。実験で、頭の後ろからスピーカーで、知っている人の声を流しておいて、そこにその人が普段付けている香水を振りかけると、声と共に匂いを感じることで、本当に後ろにいるのかという錯覚に陥るのだという。

石黒（2016）はさらに、ハグビーと名付けたクッションを使った実験について述べているが、携帯電話で誰かと話をするときに、お互いの携帯電話をハグビーの耳のところに入れて、お互いハグビーを抱きしめ合いながら電話すると、本当に相手を抱きしめて電話をしているような非常に強い感覚を得て、強い安心感を得ることができるのだという。これは早期の母子関係のミニマル・エッセンスを表すに近いのかも知れない。しかも、ハグビーで話をした前後では、携帯電話で話した場合と比べて、血液検査でストレスホルモンであるコルチゾールが有意に減少していたともいう（pp.513-518）。

他方、ニュートラルな見かけで最低限人間に見えるが年齢や性別がわからない「人間のミニマルデザイン」である「テレノイド」に対し、高齢者がほとんど例外なく非常に親しみを持って、まるで孫と話すような感覚でこれとの対話を楽しむという（pp.445-452）。これらのことは、本来の身体が取り払われた状態で、「身体性を超えられる」可能性を示唆する。二次元のオンライン空間にも応用できる要素があるかも知れない。また、筆者は、ヒト型ロボットが受付をするホテルに滞在したことがあり、^{ひとけ}人気のないロビーを殺伐としていると感じたが、違和感を覚えない人もいるかも知れない。たとえば自閉症スペクトラム障害

(ASD; autism spectrum disorder) を持つ15-18歳の人と、同年代でASDのない人が参加した実験研究 (Yoshikawa et al., 2019) で、ASDを有する参加者は、人と話す時、相手の顔の眼のあたりをあまり見ないがアンドロイド (人型ロボット) が相手だと眼のあたりを見たという。アンドロイドの方が抵抗を生じさせないらしい。

COVID-19がすさまじいスケールでもたらした社会的孤立は、子どもから高齢者に至るまで、発達、生存、心身両方の健康状態に多大な影響を与え、死亡率まで左右し得るという。その中で、デジタル空間での出会いやコミュニケーションは重要な役割を果たす可能性がある。現実世界での出会いでもオンラインでの関わりでも、その多少は神経回路的には同様の経路、海馬や前頭前野での樹状突起分枝を通して認知機能が向上したり低下したりするようであり (Bzdok et al., 2020)、つまり、オンラインでも関わりはある方が良い。

そして、私たちは、画像の向こうの存在に対して認知機能にとどまらず感情機能も働かせられること、映像の中の人に共感できる、思いを汲んで涙も流せる、ということ、を経験的に既に知っている。共感自体は、生身の人間相手でなくても、遠く離れたところにいる人の合成画像でも、アニメーションの登場人物に対してでも、少なくとも“ある程度は”生じるということを経験している。それは1つには、ミラー・ニューロン (Rizzolatti et al., 2016) という、身体性に根ざした脳のシステム、対象の運動により運動に関わる細胞が反応する仕組みが働くからだと考えられている。しかし、“どの程度までか”についての研究はまだこれからである。そして、人としての真の共感能力が育っていくためには、やはりスキンシップも含めた親密な経験を積むことが必要であろう。生まれてからの生活が本物の身体的接触、「密接距離」での関わりを欠いたヴァーチャルなものに支配されていたら、身体的経験が記憶として積み重なっていなかったら、オンラインでの関わりは、全く即物的で本当に非人間的なものになるだろう。幼少時より、スマホ漬け、オンライン漬けで育った子どもには、オンラインで必要な想像力が働かず、そもそも、心身の健全な発達が望めないだろう。そして、デジタル空間でのコミュニケーションが増える一方の今、そこでの共感の限界や問題点、共感トレーニングの方法を考える必要も出てきている (Terry & Cain, 2016)。

3. ヴァーチャルとリアルの間—研究への示唆—

本論の出発点は、筆者が、共同研究において、心理療法である箱庭療法におけるクライエント—セラピストの相互作用を実験的に検討してきたところにある。社会認知神経科学の領域における対人相互作用の研究は、個人がコンピュータ画面に映し出された画像刺激としての他者を認知する際の脳の反応の研究から始まって、二者以上が、現実世界で関わり合う場合の複数の脳同士の相互作用の研究へと発展してきた (Schilbach et al., 2013)。

最近では、たとえばバイオリニストがデュエットをする際、どちらがどうリードしたり

フォローしたりして演奏しているかを脳血流の変動から見た研究 (Vanzella et al., 2019)、音楽とイメージを組み合わせた一種の心理療法で音楽の盛り上がりによって二者間にどのような相互作用が起きていたかを脳波から見た研究 (Fachner et al., 2019) などがあり、冒頭に述べた生態学的妥当性 ecological validity がより高い方向、すなわち、より現実世界での対人関係を反映する方向の研究が目指されてきた。筆者らも、箱庭療法中の脳活動の研究をする際に、たとえばコンピュータ画面上に箱庭の画像や動画を映してたとえばそれに対するセラピストの脳活動上の反応を見るのではなく、現実の箱庭療法、とは言わないまでも箱庭制作場面に近い設定を実験室内にしつらえ、生の人対人の関わりにおける行動と脳活動上の反応を見ることにこだわってきた。しかし、COVID-19 感染拡大のためにこうした実験設定が難しくなった今、知りたい結果を得るために本当に不可欠なのは何か、を問い直さなくてはならなくなったと感じる。折しも、この金科玉条のように言われてきた生態学的妥当性を再検討しようという動き (Holleman et al., 2020) もある。生態学的妥当性の概念をきちんと定義し、本当にそれぞれの研究において、現実場面でのどのような要素、特徴を検討したいのかを吟味して文脈に合わせた研究パラダイムを設定することの重要性の指摘である。これまでの対人相互作用の実験研究を見てみると、コンピュータ画面を介して視線を合わせるような相互作用 (Saito et al., 2010) であっても、さらには話し手が話した内容の録音を聴き手が後から聴いて反応する、という時間差のあるヴァーチャルな「会話」の相互作用 (Liu et al., 2017) であっても、共感的なコミュニケーションが成立し、参加者の脳同志で同期が起こっていた、という。先に Yamamoto ら (2019) の母子相互作用に関する研究を引用したが、直接的でリアルな対人相互作用の実験研究がしばらく今は、本当に揃えるべき条件は何か、というエッセンスの再検討を行うための、良い機会なのかも知れない。そして、それには、今経験しているデジタル空間での様々な出会いの中で、どのような点は現実世界をよく再現していて、どのような点は再現できていないのかを、よく吟味することが役立つように思う。筆者らは、最近、物理的に離れたセラピールームにある砂箱に、そこにいるセラピストを介して参加者が箱庭を置いていく、オンラインでグループ箱庭^(註)を行う機会を初めて持ったが、これも1つの検証材料になると考えている。

Ⅲ 結語

以上、研究上の問題意識から出発して、今日 COVID-19 流行の影響でにわか急激な発展・普及を遂げたオンラインでの出会いを「距離」「身体性」の観点から考察し、さらには心理療法における相互作用の神経科学的研究への示唆に繋げることを試みた。この「オンラインでの出会い」は、今の世界的な危機に対処する一時的な緊急対処法にとどまらず、これからさらに変化、発展、普及していこう。新しい時代の幕開けである。

オンラインでの出会いに慣れた私たちは、いつか、他者と久しぶりに空間を共にしたときに、そこはかたなく漂う匂いや、空気感や、差し込む淡い光などに、空間を身体によって共有しているということ、自らの身体の延長線上に他者が存在する、ということに改めて眼を開かれる思いをするのかも知れない。自らの身体と他者の身体が、近い距離でつながっていること、に改めて感動を覚えるのかも知れない。そして人と人が出会うことが、本来奇跡的であることに改めて気づくかも知れない。

私たちは、かけがえのない身体的経験の記憶や気づきを大切にしつつ、且つ、「距離」や「身体性」を超えることの可能性を、日常生活でも、研究の世界でも、模索していくことになろう。いずれにせよ、人と人が直接出会い、触れあうことが容易には許されないこの特別な時間というのは、様々なことを考えさせてくれる、好機であった。

(注)：「Webワークショップ オンライン・グループ箱庭の可能性」(企画・主催：神経一箱庭研究会、講師：リース滝幸子先生)を2020年9月7日に開催した。物理的に離れたセラピストと参加者をZoomによって繋ぎ、セラピストと箱庭制作者(4名)が物理的に離れた空間且つ画面越しでグループ箱庭を行って、心的交流を持つことを試みた。

謝辞：本研究は2019-2021年度JSPS科研費 JP19K03351の助成を受けたものです。共同研究者である星 詳子先生(浜松医科大学光先端医学教育センター)、石原 宏先生(島根大学学術研究院人間科学系)、精山明敏先生(京都大学大学院医学研究科)、久保田泰考先生(滋賀大学保健管理センター)、田中琢真先生(滋賀大学データサイエンス学部)、伊藤淳子先生(杏林大学保健学部)、成田慶一先生(京都大学大学院医学研究科)のご協力に感謝申し上げます。また、本研究の内容に関して、NPSA Zoom交流会(2020年7月21日 主催：久保田泰考先生)、深層心理学研究会Zoom交流会(2020年6月7日 主催：京都先端科学大学 山 愛美先生)、現代精神分析研究会オンラインシンポジウム「コロナと精神分析的臨床：距離、オンライン、会うこと」(2020年8月10日 企画 北山精神文化研究所 北山修先生・相模女子大学 荻本 快先生)、及びリース滝幸子先生(ロサンゼルスユング研究所)からもヒントを頂きました。抄録の英文校閲は本学のマグダレナ・コウオジェイ先生にして頂きました。厚くお礼申し上げます。

文献

- Akimoto, M., Furukawa, K., Ito, J., Kubota, Y. (2016). A single case NIRS (near-infrared spectroscopy) study on the client-therapist relationship in sandplay therapy. *International Journal of Psychology* 51: suppl. 1, 2016a, 104, <https://doi.org/10.1002/ijop.12298>.
- 秋本倫子 (2019). こころと脳は対話できるか—箱庭療法の実験研究における生態学的妥当性— 東洋英和大学院紀要15, 23-36, https://toyoeiwa.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1502&item_no=1&page_id=13&block_id=17.
- 芥川龍之介 (1916). 手巾 青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/43_15268.html.
- 朝日新聞 (2020a). 最期、会いたい わがままですか 感染防止「でも電話だけではつらい」新型コロナ 2020年5月10日 朝刊, p23.
- 朝日新聞 (2020b). (新型コロナ) 面会再開、踏み出す介護施設 予約制やカーテン越し、対策念入りに 2020年6月10日 朝刊, p17.
- Bzdok, D., Dunbar, Robin I.M. (2020). The neurobiology of social isolation. *Trends in Cognitive Sciences* 24 (9), 717-733.
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1998). *Life Cycle Completed*. New York: W.W. Norton & Co. Inc. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2001). ライフサイクルその完結 増補版 みすず書房
- Fachner, J. C., Maidhof, C., Grocke, D., Nygaard P. I., Trondalen, G., Tucek, G., Bonde, L. O. (2019). “Telling me not to worry…” Hyperscanning and neural dynamics of emotion processing during guided imagery and music. *Frontiers in Psychology* 10, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.01561>.
- Hall, E. T. (1966). *The Hidden Dimension*. New York: Doubleday. 日高敏隆・佐藤信行 (訳) (1970). かくれた次元 みすず書房
- 平野啓一郎 (2016). マチネの終わりに 毎日新聞出版社
- Holleman, G. A., Hooge, I., Kemner, C., Hessels, R. S. (2020). The ‘Real-World Approach’ and its problems: A critique of the term ecological validity. *Frontiers in Psychology* 11, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.00721>.
- 石黒 浩 (2016). 人とロボットが共生する未来社会 電子版 立東舎
- Liu, Y., Piazza, E. A., Simony, E., Shewokis, P. A., Onaral, B., Hasson, U., Ayaz, H.

- (2017). Measuring speaker-listener neural coupling with functional near infrared spectroscopy. *Scientific Reports* 7, 43293, <https://doi.org/10.1038/srep43293>.
- Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard. 中島盛夫 (訳) (1982). 知覚の現象学 法政大学出版局
- 百木 隼 (2020). テーブル囲まぬ議論の形 朝日新聞2020年5月13日 夕刊, 2面
- 武者小路実篤 (1952). 愛と死 新潮社
- Rizzolatti, G., Sinigaglia, C. (2016). The mirror mechanism: A basic principle of brain function. *Nature Reviews Neuroscience* 17 (12), 757-765.
- Saito, D. N., Tanabe, H. C., Izuma, K., Hayashi, M. J, Morito, Y., Komeda, H., Uchiyama, H., Kosaka, H., Okazawa, H., Fujibayashi, Y., Sadato, N. (2010). “Stay tuned”: inter-individual neural synchronization during mutual gaze and joint attention. *Frontiers in Integrative Neuroscience* 4 (127), <https://doi.org/10.3389/fnint.2010.00127>.
- Schilbach, L., Timmermans, B., Reddy, V., Costall, A., Bente, G., Schlicht, T., & Vogeley, K. (2013). Toward a second-person neuroscience. *The Behavioral and Brain Sciences*, 36(4), 393-414, <https://doi.org/10.1017/S0140525X12000660>.
- Schmuckler, M. A. (2001). What is ecological validity? A Dimensional Analysis. *Infancy* 2(4), 419-436.
- Sullivan, R., Perry, R., Sloan, A., Kleinhaus, K., Burtchen, N. (2012). Infant bonding and attachment to the caregiver: Insights from basic and clinical science. *Clinical Perinatology* 38(4), 142-144.
- Terry, C., Cain, J. (2016). The emerging issue of digital empathy. *American Journal of Pharmaceutical Education* 80 (4), 1-4.
- 東洋経済ONLINE (2020). リモート参列も現れた「ウイズコロナの葬儀」
<https://toyokeizai.net/articles/-/367337>,
2020年8月13日記事 2020年8月29日閲覧
- Vanzella, P., Balardin, J. B., Furucho, R. A., Morais, Guilherme A. Z. M., Janzen, T. B., Sammler, D., Sato, J. R. (2019). fNIRS responses in professional violinists while playing duets: Evidence for distinct leader and follower roles at the brain level. *Frontiers in Psychology* 10, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.00164>.
- Yamamoto, E., Matsuda, G., Nagata, K., Dan, N., Hiraki, K. (2019). Subtle temporal delays of mothers’ responses affect imitation learning in children: Mother-child interaction study. *Journal of Experimental Child Psychology* 179, 126-142.

Yoshikawa, Y., Kumazaki, H., Matsumoto, Y., Miyao, M., Kikuchi, M., Ishiguro, H.
(2019). Relaxing gaze aversion of adolescents with autism spectrum disorder in
consecutive conversations with human and android robot—a preliminary study.
Frontiers in Psychiatry 10, <https://doi.org/10.3389/fpsy.2019.00370>.

Distance and Physicality in Online Encounters: Implications from and for Social Interaction Research

AKIMOTO Michiko

Key Words: online, encounter, distance, physicality, social interaction

The spread of COVID-19 has had an enormous impact both on our daily lives and our research. The opportunities of meeting people have been dramatically reduced and we have had to change the ways we meet and gather. Many of us have transitioned to online communication.

Our team has been conducting experimental research on sandplay therapy to examine real-time interaction between the client and therapist. However, as it is not possible to gather participants in the laboratory, the author has come to consider how much a virtual encounter could replace a face-to-face meeting.

In this paper, the author discusses differences between in-person encounters and online meetings from the viewpoints of 1) distance, 2) physicality, and the 3) difference between the virtual and the real, seeking for some implications for our study.

Anthropologist Edward T. Hall suggests four categories of distance in human relationships: 1) intimate distance, 2) personal distance, 3) social distance, and 4) public distance. He also describes their characteristics and purposes. Online encounters can bring partners to an intimate distance immediately regardless of the nature and purpose of the meeting. While physical distance and time away from each other may at times deepen the relationship, connecting instantly can be both convenient and invasive. Also, our perception of others is rooted in physicality. Although we can imagine the partner's body parts hidden from the screen, the image is based on our memory of prior experience. Humans have the ability to empathize, due to the mirror neuron network and other circuits in the brain, yet lack of close, intimate contacts with the caregiver in infancy may hamper the development of empathy. Moreover, elderly people have a strong need to meet directly and touch each other, especially when

they are separated due to hospitalization or institutionalization. Such opportunities have been lost due to “social distancing.”

Social interaction research in cognitive neuroscience has been seeing a shift from virtual computer screen-based studies on individual brains to real-world interaction paradigms. Considering the ecological validity, it might be necessary to reconsider which components of face-to-face interactions are essential and which can be examined in virtual settings. The unusual situation brought by COVID-19, though it may be a crisis, has offered us an opportunity to rethink the meaning and ways of meeting, and how we conduct laboratory research on social interaction in psychotherapy.

